

目の前の 植物から学ぶ

総括学芸員（博物館学）
布谷知夫



以前に「のびる・ひろく・ひろがる」という企画展を実施したとき、展示に必要な材料をできる限り近くから集めようとした。展示会の目的が、身近で普通にある植物が行なっている繁殖行動から、植物の面白さを知ってもらおうということだったので、変わった植物ではなく、毎日見ている植物を材料にしたわけです。

そのため展示会で使った写真や資料は、大半を博物館がある烏丸半島の中で、一部をJR守山駅前の田んぼ、そして一部を近江八幡市の湖岸の公園で撮影し、収集しました。



やはり身近なところをきちんと観察することから始めるのが大切ということを改めて学びました。

ホトケノザ

展示の中で使うために、アリがホトケノザの種子を巣に運び入れ、種子についている食べる部分だけを切り取ったあと、巣から運び出して近くに捨てるのを、近江八幡で観察しました。結果として種子をホトケノザの株の位置からあちこちに、ばら撒いてくれるということになり、「アリ散布」といいます。

ところがそういう観察をして目が慣れてくると、琵琶湖博物館の建物のすぐ横でも、同じ光景を観察できることがわかりました。ホトケノザがあるところでは、どこでもやっているわけです。

博物館との付き合いは、博物館の活用を考える会に「滋賀虫の会」として参加してから続いています。現在は、あまり熱心な会員ではありませんが、「うおの会」にも入らせていただき、ときどき参加させていただいています。

基本的には大勢で調査を行うのは苦手で、好きなときに好きなところで、飽きたらすぐやめ、熱中したらりりでも没頭している、こんな採集調査が好きです。

ところが、最近、歳のせいでもともと虫屋で、滋賀県におけるチョウの分布調査をライフワークとしており、かなりの滋賀県の奥地まで入る機会が多いのです。そのような地域は携帯電話の電波も届きません。2〜3年前は一人でも平気でしたが、最近是不安がよぎります。やはり歳には勝てません。

博物館の学芸員の先生方はどうしても仕事の関係で館内にいることが多くあります。たまにフィールドに出ても観察会などで本来自分がしたい調査がなかなかできません。基本的に生き物の分布調査はわれわれの範疇で、その結果を料理するのが学芸員の先生方の仕事と考えています。



うおの会会員 遠藤真樹

好きです。

そうにありません。

とはいえ、数には勝てず多人数でやる調査にはかないません。大勢で調査すると、必ず意外な物を、意外な場所で見つかる人が出てきます。魚の種類や数も当然多くなります。やはり調査は、大勢でやる方がより正確にその環境を把握できます。それでも、単独あるいは私の性格を知りつくした人間と好きな場所で、好きな魚を探すスタイルを変えられ

こんにちは！ 展示交流員です。



私たちは、琵琶湖博物館の案内だけでなく、展示を通してみなさんと交流し、みなさんに身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっています。どうぞお気軽にお声をかけてください。

今回は、昨年度に実施した「交流員と話そう」からの取材です。来館者の方とどんな交流があったのでしょうか。

「メタセコイア（杉本交流員）このテーマを選んだ理由は？」

メタセコイアはスギ科の針葉樹で数千万年前に世界各地に繁茂していましたが、その後、絶滅したと思われていました。しかし、1941年に中国で発見され、現在は「生きている化石」といわれています。

古琵琶湖層からもメタセ

コイアの球果化石が産出していて、非常に古い時代に栄えていた植物が今も現存しているということに興味を持ちました。

お客さんとの交流は？

A 展示室の「植物化石」



コーナーでは球果の拡大模型が展示してあり、拡大鏡で構造が見られるようになっています。ちょうどクリスマス時期でもあったので、本物の球果を使ってクリスマスリースを作ってもらいました。

「メタセコイアは好きな木なんです」、「学校の校庭にありました」とおっしゃる方もおられ話が弾みました。

「思い出クイズ（池畑交流員）おもしろい題名ですね？」

「わたしたちのくらし40年のコーナー（現在は「わたしたちのくらし50年」）で壁の展示物を題材にクイズを作り、来館者の方に回答してもらいました。このコーナーは、昭和30年代までのさまざまな「モノ」を



展示していますが、C展示室への導入部でもあるのです。じっくり見ていただいて、意図しているのは何かを感じてほしいと思いました。

お客さんの反応は？

「難しい」、「楽しい」などさまざまでした。こちらが意図することを伝えるのがなかなか難しいです。また、クイズを紙面で作ったのでアンケート調査と勘違いされたこともありました。